

# 光受寺通信

NO.206

発行元 光受寺  
R03.01 発行



多くの人の中には「死んだら終わりの」という思いで生きてい  
らっしゃる方もあると聞きます。

確かに自分一人の命として、そんな風に生きられたらど  
んなにか気持ちが悪なことかと思われたりもします。しかし、私  
たちは自分一人で生きていくわけではありません。社会と関  
わり合いながら、苦しみ迷いながら生きていくわけです。家族  
があり大切な友人があり、尊敬する人もいます。

父母の死、相手の死、子供の死に出会った時、そんな風に割  
り切って生きられるのでしょうか。また、地球上ではあちらこ  
ちらで戦争が起こり、多くの人が亡くなっています。それらの  
人々の「死」をどう受け止めたらいいのでしょうか。やはり、死  
んだら終わりと受け止めるのでしょうか。

親鸞聖人が『教行信証』の化巻に示されたお言葉には、

「何となれば、前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者  
は前を訪へてぶえ、連続無窮（れんぞくむげう）にして、願わく  
は休止せざしめらんと欲す。無辺の生死海を尽くさんかため  
のゆえなり」とありますが、亡くなった人は、私との新たな関  
係性の中で、さまざまにはたらきかけられ、人生の苦難から離  
れられるよう導いていた存在となっていくのではないかと  
思っています。

それはまさに浄土教の重要な教義のひとつである阿弥陀如  
来よりたまわる「種類の回向」「往相・還相の二回向」の、「還相  
回向」という教義に依るものと知らされてきます。死んだら終  
わりといっている人にも、望もうと望まない、弥陀の本願は  
常にはたき続けられておられるのです。最後は、「ん」「口」で終  
わり。それが人生の目的であり、お望みだったのでしょうか？

## 「念仏もつとくおもいたつ」の思い出

M・M

年が改まり、乱雑になっていた机の書類を整理している中で、平成二十六年に巡  
拝した関東の「二十四輩」の書類が出てきた。そこから歎異抄関係の文書がなぜか  
出てきました。それを読み返したとき、第一章の文面が決定的に重要であることに  
改めて気づきました。そこでこの小文で特に感じたところを申し述べさせていただきます  
という思いです。

特に大事だと思われる部分は、第一章の最初の4行だと思います。「弥陀の誓願不  
思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐなりと信じて、念仏もつさんとおも  
いたつ」ころのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたもうなり」とあ  
り、とくに大事なことは「念仏もつさんとおもいたつ」ころのおこるとき「一節で  
す」念仏申したときではなく「念仏もつさんという心があきたとき」とある点で  
す。「一節の核心は「信心であつて行いではありません」心遣いの大切さを述べら  
れているわけです。つまり感謝の念仏です。阿弥陀の慈悲に感謝を申し上げる場面  
です。「このころをしっかりと受け止めないと以降の条文も誤解になっていくこと  
が分かりました。

## お知らせ

今月のお寺サロン・同朋会はお休みです。

## 春季永代経

二月二十日(金) 十時〜 午前・午後

法話 午前 G・G 師 午後 住職

## 歩くまち墨俣

## ふるさと景観かるた

京都の画家が光受寺の  
梅をみて、後に送って  
くださった「かるた」の  
原画となった絵です。



残り香漂う  
花びら飾る  
しだれ梅



お天気は良かったが風が冷たい一日となったこの日、廣専寺門徒・光受寺門徒他二十名ほどのご参加をいただきこの開催となりました。

今回は当寺若院「ふひひ」「二十四孝」についての話となりました。「二十四孝」とは儒教の考えを重んじた中国の、孝行が特に優れた24名の説話なのです。「門徒の皆さんは光受寺にも4枚の彫り物が額として掲げられてゐることはご存じだと思いますが、そのうちの四枚なのです。



特にその中でも「孟宗の筍掘」が有名です。孟宗は人物名ですが、この孟宗が病気の母親を看病していたある冬の日のこと、母親は筍が食べたと言いつ出しました。孟宗は、まだあるはずもない筍を探しに行つたのです。涙ながらに天に祈り、雪を掘つてゐるとあつたという間に雪は解け、筍を探ることができたという話です。孟宗竹の孟宗はこの人物の名前のことなのです。

この日の学習のテーマはこの章の冒頭に「煩惱具足の身をもつて、すべしを悟りを開く」といふこととありますが、「この世で何を悟りを開くことができる」といふことに対する歎異の章です。

真言密教系の宗教では心身を安楽にする難行(修行)によつて悟りを開くこととするものですが、浄土真宗では煩惱具足の身の上においては、今、現在、弥陀の本願を信じていふことによつて不退転の位、正成就の位に就き、死後に弥陀の本願によつて仏と同じ悟りを開くと説いています。これが「平生業成」といふ真宗の大切な教えとなつてゐるのです。



したがうしこの世では悟りを開くことはできなかつたことが真宗の教えです。ただそのためには「信心」が肝要なのですが、親鸞聖人は「信心」は「お前を必ず助ける。仏にする」といふ如来の音が聞こえてくることだと言われてゐます。私が作り上げる信心など生死の問題の前には何の役にも立たないのです。如来の願いが聞こえてきた時、私の口から念仏が生まれ出つてゐるのです。

今月の掲示板

法のきく みちじいころの

さだまねば

南無阿弥陀仏となえよすれ

トイレの手すり

完成いたしました。

1月中旬、ようやく念願の洋式トイレ、手すりが完成いたしました。

トイレは最低限の装備ですが、便座も暖かく温水も出ます。立ち上がる時には、手すりもつけてありますので足腰の不自由な方にも安心してご利用いただけると思います。ただ自動では水を流すことはできませんので、手動をお願い致します。



心地よくご利用頂けると思います。

手すりは一本だけですが、ささくご利用いただいた方からは、これだけでもいぶん楽で、安心して上り下りができますと喜んでいただくことができました。



お文第4帖4通にある歌。 意訳 如来の本願を聴いて、この道に心が定まれば、その尊さ、ありがたさに、南無阿弥陀仏と念にお応えし、感謝するお念仏を称えるばかりです。

この第4帖は一月号にも紹介しましたが、蓮如上人63歳頃に書かれたお文だと思われまふ。自分の一生を振り返り、死とは無縁のような思いで生きてきたが、ふたふたへきえてみれば夢幻のような空しいものだったと気づくことができました。今この輪廻する迷いの世界から離れ出る一すじの道の他には願うべきものはなくなりました、歌をわたくしに送ります。